

河津平安の仏像展示館



日本を代表する、平安期の文化財を鑑賞

町内奥谷津の里にある古刹、南禅寺(なぜんじ)。地域の人たちが昔から守り続けてきた平安時代前期から伝わる貴重な仏像群がこのお寺には伝えられています。県内最古と言われる平安時代前期(九世紀)の仏像、薬師如来坐像や、東海地方最古(十世紀)の「地藏菩薩立像を始め、そのすべてが文化財指定を受けている宝物です。(静岡県指定有形文化財十一体、河津町指定有形文化財十五体)

昭和五十三年にヨーロッパで開催された日本美術展に出品され大絶賛を博した「天部立像」や、平安中期の「十二面観音立像」など美術品としても見応えのある像が数多く含まれています。

こうした貴重な仏像群を公開・展示するために、平成二十五年、南禅寺に隣接して「河津平安の仏像展示館」が開館しました。地域の方はもとより一般観光客も、河津の歴史の宝を気軽に鑑賞することができます。



久遠のやすらぎを願った
古人(いにしえびと)の想いは、今も。

雄大にそびえたつ千年の生命の灯から、
見えない力が心に満ちる。

河津町民の暮らしを、 見守りつづける町のシンボル

河津町ならではののどかな田園風景の中にひっそりとたたずむ鎮守の森、来宮神社(杉梓別命神社)。静かな空気がたどよう神域であるこの神社の境内に、ひとしきわ雄大にそびえる大楠があります。それがご神木の大楠。樹齢一千年余りを数え、伊豆を代表する巨樹のひとつとして国の天然記念物にも指定されています。

地域の歴史と人々の営みを静かに見守り続けたこの巨樹は、河津町のシンボルであるとともに、近年では荘厳な気を感じられるパワースポットとして、多くの観光客の人気を集めています。



全国にも数少ない、 寝姿のお釈迦様を祀るお堂

河津町には、全国的にもわずか三十四カ所しか確認されていない希少な仏像のうちのひとつが存在します。お釈迦様が沙羅双樹の木の下に身を横たえた寝姿の仏像「涅槃仏」を安置したお堂「涅槃堂」がそれです。

町内沢田にあるこの涅槃堂は、町の文化財に指定されており、静岡県内で唯一の涅槃堂とされています。またその涅槃像群も全国にわずか八例とさらに希少価値が高く、中でもこの涅槃像群と同じ木造のものは四例が確認されているのみです。

この堂は寛永年間(一六二四年～一六四三年)に建てられ、寺の住職のための休憩寺である「控寺」と伝えられています。

堂内に安置された涅槃像群は、釈迦が紀元前四世紀の二月十五日に、故郷に近いクシナラの沙羅双樹の下で、八〇歳の生涯を閉じた様子を表現しています。

涅槃仏は、一木造りで、像高二m五十八cm。地方作(じかたさく)の漆箔像で、像の後ろに立つ阿彌陀如来三尊像は、釈迦を極楽浄土に迎えに来た姿を表わしているとされています。

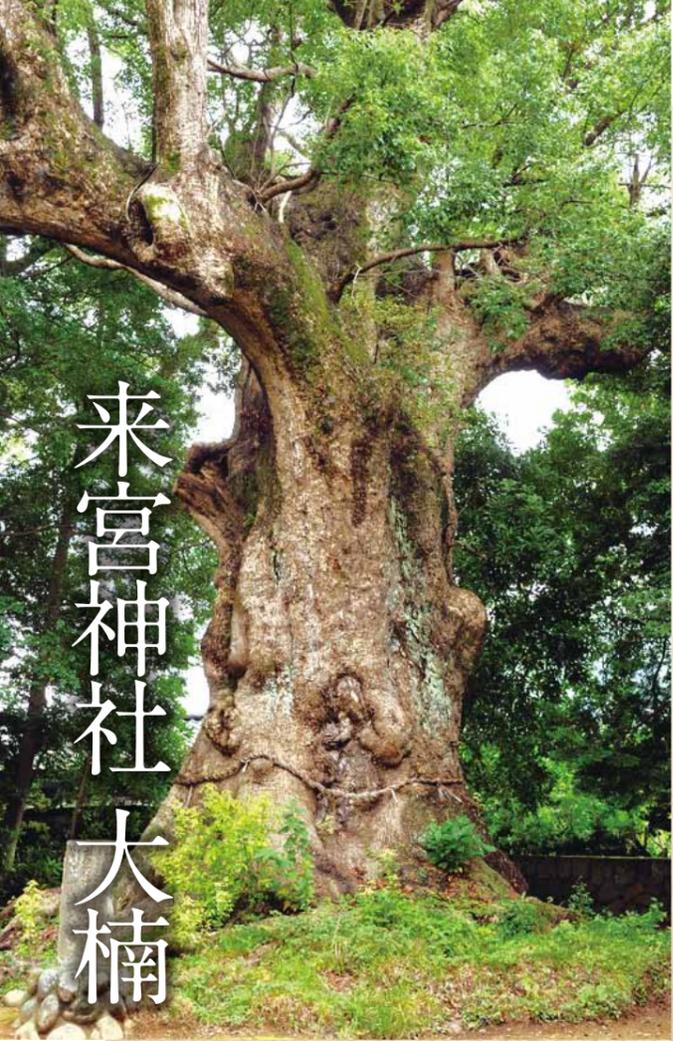
また、二十二体の像が両側に配され、悲しみに沈む人々の姿を映し出しています。さらに堂内の梁には、顔料で彩色された華鬘(堂の内陣にさけて仏前を飾る装飾)が施され、飛天が雲上を飛ぶ姿を表わしています。古くから、この地域に災害や流行病があった

た時にはここに村人が集まり、百万遍念仏の祈願が行われたとされ、当時使われた版木・大数珠などが今も残されています。

平成五年に、町指定有形文化財に指定され、「河津桜まつり」の期間にあわせて一般公開されています。二月十五日には沢田地区の住民による涅槃会も行われています。



来宮神社 大楠



沢田涅槃堂

【河津町55年の歩み】

西暦1958	昭和33年	上河津村と下河津村が合併し、河津町が誕生。人口1万464人、世帯数2054戸。	西暦1992	平成 4年	「県みずべ100選」に今井浜海岸と河津七滝が選ばれる。
1961	昭和36年	伊豆急行開通。			温泉スタンド「ほっとステーション」オープン。
1963	昭和38年	田中に役場新庁舎が落成。国民宿舎「かわづ」落成。			湯ヶ野自主防災会が県自主防災活動推進大会で県知事褒章受賞。
1965	昭和40年	「伊豆の踊子」の作者、川端康成氏を迎え湯ヶ野で「伊豆の踊子文学碑」除幕式が行われる。	1993	平成 5年	かわづ花の会設立。
1966	昭和41年	初景橋完成。			踊り子温泉会館落成。開館1カ月で利用者1万6千人を超える。
1967	昭和42年	国道135号全線開通。総工費約37億7千万円。広報「かわづ」第1号発行。	1994	平成 6年	サンシップ今井浜落成。
1968	昭和43年	河津町章制定。段間遺跡に新たに住居跡が発見される。			国道414号新しい峰山トンネル開通。
1969	昭和44年	見高パイロット事業が開始。	1995	平成 7年	重度視覚障害者を対象としたガイドヘルパー派遣事業開始。
1970	昭和45年	「新天城トンネル有料道路」開通。			環境庁調査で今井浜海岸がきれいな海全国ベスト7に選ばれる。
1971	昭和46年	河津八幡神社三番叟が町文化財に指定される。	1996	平成 8年	第1回天城峠コンサート開催。
1972	昭和47年	農業構造改善事業で1億4千万円をかけカーネーション団地「花泉園」が完成。			来宮神社祭典で「鳥・酒精進太鼓」初披露。
1973	昭和48年	県営パイロット事業で見高入谷にみかん生産団地が完成。			広報かわづが県コンクールで優秀賞。全国コンクールに出品される。
1974	昭和49年	林道長久保線完成。「滝祭り」が始まる。	1997	平成 9年	天皇皇后両陛下、天城ご視察のため来町される。
1975	昭和50年	伊豆半島沖地震発生（M7.0）。大堰浄水場完成。			宗太郎杉と天城の森が「しずおか森を育む森50選」に選ばれる。
1976	昭和51年	第1回老人スポーツ大会開催。町の木に「河津桜」、町の花に「花菖蒲」が制定される。	1998	平成10年	保健福祉防災センター完成。
1977	昭和52年	集中豪雨で町全域に被害。総雨量509ミリ。河津地震発生（M5.5）。			デイサービス事業開始。
1978	昭和53年	湯ヶ野山に環境衛生センター（ごみ処理施設）建設。総工費2億1926万円	1999	平成11年	町のホームページ開設。
1979	昭和54年	初景橋のほとりに「伊豆の踊子像」完成。			かわづ花菖蒲園オープン、入園者2万人を超える。
1980	昭和55年	新・館橋完成。総工費1億3200万円。	2000	平成12年	佐ヶ野川親水公園完成。
1981	昭和56年	伊豆大島近海地震発生（M7.0）。「駅前プラザ」オープン。			第1回健康ふれあいまつり開催。
1982	昭和57年	来の宮橋完成。	2001	平成13年	日本さくらの会「百万本植樹運動」で河津桜記念植樹式が行われる。
1983	昭和58年	新天城道路鍋釜トンネル・高架橋開通。			川端康成生誕100年記念事業。
1984	昭和59年	西中学校・南中学校が統合、河津中学校が発足。河津駅前にも曾我兄弟像建立。	2002	平成14年	春ノ蔵公園整備事業着工。
1985	昭和60年	七滝ループ橋開通。			「第10回河津桜まつり」に125万人が訪れ伊豆を代表するイベントになり、しずおか観光大賞受賞。
1986	昭和61年	天皇陛下が「大噴湯、大そてつ」をご見学。	2003	平成15年	鉢の山316万㎡を自然環境保全と活性化のため取得。
1987	昭和62年	南小学校新校舎が完成。白馬村と姉妹都市提携を結ぶ。			きれいな町づくり条例制定
1988	昭和63年	西小学校新校舎・体育館が完成。	2004	平成16年	河津バガテル公園が開園。
1989	平成元年	町制施行25周年、商工会設立20周年を記念し、第1回産業まつりを開催。			天城山隧道（旧天城トンネル）が国の重要文化財に指定される。
1990	平成 2年	白馬村を町民204人が民間大使として訪問。B & G 河津海洋センターがオープン。	2005	平成17年	エコクリーンセンター東河稼働・ごみ分別収集開始。
1991	平成 3年	端戸山テニスコートがオープン。			パリ市と河津バガテル公園友好技術支援協定締結。
		第1回ミス伊豆の踊子コンテスト開催。	2006	平成18年	白馬村姉妹都市提携20周年・白馬村民来町。
		河津七滝・今井浜海岸「静岡の自然100選」に認定。			図書館を備えた「文化の家」落成。
		国道414号（天城路）「日本の路100選」として選定される。	2007	平成19年	役場新庁舎落成。
		南小学校体育館が完成。			町制45周年・河津桜生誕50年記念式典。
		白馬村との姉妹都市提携5周年を記念し、併せて長野オリンピック実現を支援するためのリレーマラソンが行われる。	2008	平成20年	東京都渋谷区と災害時相互応援協定を締結。
		町制30周年記念式典を開催。			河津桜原木を町指定天然記念物に指定。
		東小学校体育館が完成。	2009	平成21年	第15回河津桜まつり来遊者が7年連続100万人を超える。
		梨本前之川橋完成。			パリ・バガテル公園100周年記念式典で河津バガテル公園の5周年記念花「クイーンバガテル」披露。
		町営温泉集中管理事業が始まる。	2010	平成22年	県市町村合併構想で南伊豆地区（下田市・賀茂郡）が合併構想の対象市町となる。
		用途地域（都市計画）指定される。			3幼稚園を統合した「町立さくら幼稚園」が開園。
		湯ヶ野湯坂が手づくり郷土賞「ふるさとの坂道」に選定される。	2011	平成23年	河津バガテル公園開園6年目で入園者数100万人を超える。
		踊子歩道が手づくり郷土賞「街灯のある街角」に選定される。			日帰り入浴施設伊豆見高入谷高原温泉オープン。
		伊豆南部の集中豪雨により町内各地で約42億円の被害。	2012	平成24年	地方自治法施行60周年記念で河津町が地方自治功労団体で表彰される。
		温泉集中管理事業が約12億円で完成。			峰温泉大噴湯公園オープン。
			2013	平成25年	新学校給食センター完成。
					町制50周年。
					国民文化祭「フランス民族舞踊と伊豆の伝統芸能の祭典」開催。
					河津桜観光交流館オープン。
					第4次総合計画
					「人と地域、自然と文化」夢あふれるまち「河津」策定。
					白馬村姉妹都市提携30周年事業開催。
					田中バイパス「かわづいでゆ橋」開通。
					河津平安の仏像展示館オープン。



踊り子温泉会館オープン（平成5年）



国民宿舎「かわづ」完成（昭和38年）



河津バガテル公園オープン（平成13年）



集中豪雨に見舞われる（昭和51年）



天城山隧道（旧天城トンネル）が国の重要文化財に指定される（平成13年）



七滝ループ橋開通（昭和56年）

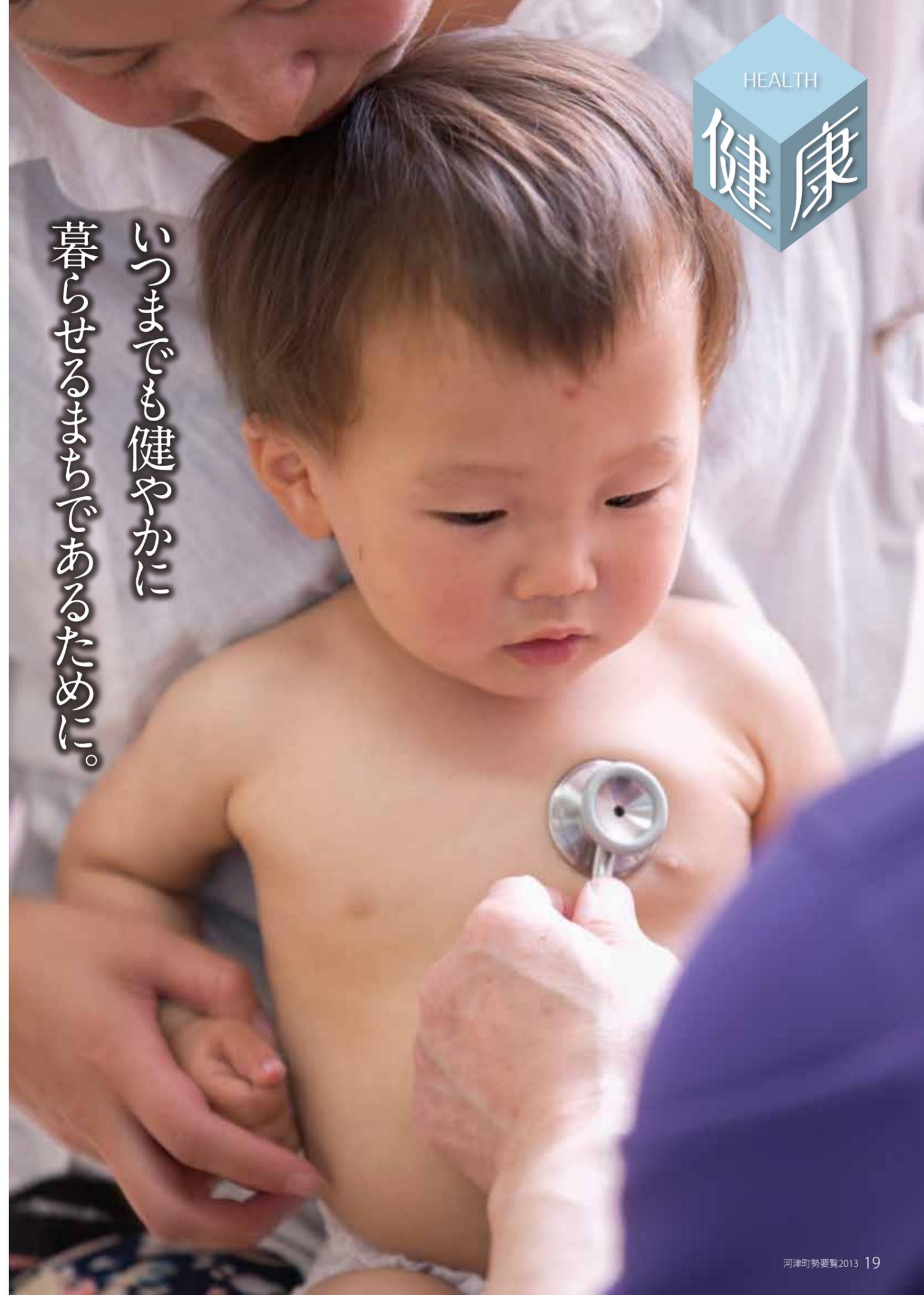


河津桜観光交流館オープン（平成22年）



湯ヶ野湯坂「ふるさとの坂道」に選定される（平成2年）

いつまでも健やかに
暮らせるまちづくり



**町民すべてが、健やかに
笑顔で暮らせるまちづくり**

豊かな環境に恵まれた河津町。その優れた点を十分に活かし、すべての町民がいつまでも快適に暮らしていくためには、何よりも町民自身が心身ともに健やかであることが肝心です。

河津町では、町民自身が健康な暮らしへの意識を高めていけるよう町ぐるみ地域ぐるみでの様々な啓発活動を展開するとともに、乳幼児から高齢者まで、それぞれの特性や課題に合わせた検診や診療補助、保育教室や健康教室などの取り組みを行っています。

さらに豊かな温泉の恵みを利用した各家庭への温泉宅配事業など、河津ならではの事業を積極的にを行い、町民の健康に寄与しています。

**福祉環境と医療環境の
さらなる整備に向けて**

全国的に少子高齢化が進む時流にあつて河津町もその例外ではありません。こうした中、地域の大きな課題となるのが、未来を担う子どもたちから高齢者までを幅広く、そして手厚くカバーできる高度な医療・福祉体制の充実です。

年齢や経済的理由などを要因として町民の享受できるサービスが制限されたり、また差がついたりすることのないよう、町では従前より、皆が等しく高度な医療・福祉を受けられる地域医療福祉体制の確立を進めています。

特に救急医療に関しては、伊豆全域を見渡



乳幼児健診

した広域医療ネットワークを基本とし、日頃から数々の基幹病院との密な連携を図りながら、高度医療サービスの普遍化を進めています。

**地域全体で取り組む
高齢者の生きがいづくり**

身体の健康とともに、特に高齢者に対しては「心の健康」のあり方も重要な課題です。高齢者の生きがいとは何か、毎日を充実して暮らせるための力ぎとなるのは何か。つねに高齢者の悩みや同世代ネットワークなどに配慮しながら、誰もが自分の生きがいを見つけ

**子育て世代を力強く応援する
サポート体制**

育める環境を整備しています。高齢者特有の、身体への不安から生じる生活全般への不安を払拭するため、保健福祉センターでの各種サービスや、在宅介護体制の充実、老人クラブの積極サポートなど、積極的な行政サービスの浸透・拡充を行うとともに、高齢者がいつも生き生きと過ごせる地域環境や意識啓発などにも努めています。

核家族化が一般化し、女性の社会進出がより活発になるなど、人々の生活形態や習慣が



介護予防教室



大きく様変わりしていることを背景に、子育ての環境も大きく変化してきています。特に女性が家庭に不在となることが多くなるにつれ、多様な・拡大する保育需要への対応は急務です。

次代を担い、町の将来を築くべき子どもたちを、より恵まれた環境ですくすくと育てていくためには、地域全体によるサポートが欠かせません。

町では子育てに関する相談や情報を共有する体制を整備充実し、母親の精神的重圧や不安を解消するとともに、保育施設とその機能の拡充を図るなどソフトとハードの両面から、子育て世代を全面的にバックアップしています。



今を支える人を充たし、
次代をひらく人を育む。

**一生涯にわたっての
学びを支える教育環境づくり**

青少年に限らず、人にとって「学ぶ」ことは生きることの喜びそのものです。町ではすべての町民に生涯学習の機会と環境を提供するとともに、学びの喜びを感じ取ってもらうことを基本理念としています。

また町民の健康を増進し、張りのある明るい生活づくりを支援するための生涯スポーツへの取り組みも盛んに行われ、老若男女の幅広い町民がそれぞれにスポーツを楽しむ姿を日常的に目にすることが出来ます。

さらに芸術や文化の後援も町の主要な施策のひとつです。町の歴史に育まれた独自の文化を守り、また次代に引き継ぐことで町民としての誇りを育成し、河津町民としての高い意識形成を促しています。

**幼児から青少年までの、
健やかな成長を見守る**

次代の主役である子どもたちの学習環境整備は、町の将来を見据えた重要な柱のひとつ。

幼児教育、初等教育の環境整備と拡充はもちろん、より高度な学習を受ける機会と学力向上のため、学校教育では教職員の資質向上への取り組みや、高度情報化社会に適応したネットワーク学習設備の充実などを積極的に進めています。

また不登校やいじめなど、近年社会的な問題としてクローズアップされている学校内でのトラブルについても、学校と家庭、地域などが一体となって「子どもを見守る」意識を強

化し、地域ぐるみでの子育て機運を高めながら、課題の解決ではなく課題の発生そのものを防ぐよう努めています。



**全人格的教育で、
次世代を担う人材を育てる**

青少年教育の中でも、幼児・初等教育時は人間形成の基礎が養われる期間。また中等・高等教育時は、自分自身の価値観や社会的判断力を身につける時期、とその役割も異なっています。

成長段階や教育ステップごとにそれぞれ重要な役割がありますが、それらを一貫する

基本理念が最重要であることは間違いありません。町がめざす全人格教育とは、社会の中で他と協力しつつ、自身の個性を發揮できる人格を育てることが目的です。こうした方針のもと、町内の各学校では学校ごとに特色のある学校教育方針および年度ごとの指導指針に基づき、大らかな生徒たちの育成に尽力しています。

**人の交流から生まれる
学びの意欲と文化の継承**

長い歴史と生活の中で継承されてきた河津町ならではの文化。



地域社会の変化により、こうした文化を次代に伝え、異世代との活発な交流から生まれる学習機会は年々減少しています。町ではこうした活発な世代間交流を支援し、河津町民としての誇りを育むことに努めています。

また国際交流がますます盛んになるポータル社会を舞台に自立できる人材を育成するため、外国人教員の積極導入など、国外で活躍するための基礎づくりも進めています。

にぎわいと交流にあふれる、 新たな河津へ。

地域資源の積極活用で さらなるにぎわいの創出へ

「河津桜まつり」に代表されるように、河津の地域資源に再注目し、多彩なアイデアと具体的な実行力で商品化することで、そこには多くの人に注目されるような新たなにぎわいが創出されます。

また観光を主産業とする河津町にとって、海外からの観光は、将来的にも大きな可能性と魅力を秘めたマーケットだと言いうことができています。

「河津では当たり前のものが、実は、他地域の人々にとっては、わざわざ足を運ぶほどの注目に値するものである」。国や地域を越えたポータルな情報交流が広く一般化した現代では、こうした事象がますます増えてきます。

町が持つ地域資源の 新たな発掘と振興

河津桜やバラなど、すでに「観る」観光資源として存立している物の魅力をさらに多角的に展開。ドライフラワーや押し花、寄せ花、香水、ジャム、ワインなど、さまざまな力テクノロジーで横断的に活用することで、河津の新たな特産の創出が図れます。

こうしたプロジェクトは、ひとり花卉栽培事業者だけでなく、食品加工事業者や観光事業者、販売事業者など、広範な分野の人々が協力し、町の産業活性という同じ目的の下に集うことで初めて具現化します。

町が持っている人材と物、アイデアと展開力などを結集すれば、まだまだ河津の魅力は発掘できるはず。



踊子歩道(猿田淵)

例えば、釜滝の上流に位置する猿田淵を中心として整備された猿田淵遊歩道は、天城の大自然が手つかずの状態に残っている夏でも涼しい遊歩道として人気を集め、河津七滝とともに『伊豆半島ジオパーク』の新たなスポットとされています。

また県内初であり全国でも数少ない、片塔式ウエーブ橋(全長約四十六m、幅員一・五m)である「河津踊子滝見橋」が開通し、河津七滝(踊子歩道)にまた新たな魅力が加わったことで、観光スポットとしてのさらなる発展が見込まれています。

産業観光、生活観光など 新たな観光資源への投資

山、海、川など、多種多様な自然を持つ河津町。これまでは主に海水浴を中心とした夏場のレジャー需要に依る形で発展を重ねてきましたが、観光客のニーズが変化・多様化してきている観光市場においては、画一的なひとつのカテゴリーに絞った観光開発ではなく、幅広いニーズに 대응する受け皿としての機能が求められています。

昨今注目を集めている「里山」や、環境意識の高まりに伴う田舎暮らしへの興味の高まりなど、河津に「当たり前にあるもの」の観光の魅力が俄然上昇している今、これらを商品化していくことは自然の流れです。

例えば平成二十年に整備された峰温泉の大噴湯公園などもその代表的な例です。大正十五年十一月に爆音とともに地上約五〇mもの湯煙をあげて誕生して以来八〇年以上にわたって毎分六〇リ、一〇〇℃の



峰温泉大噴湯公園



河津桜観光交流館

温泉を噴き上げ続ける全国でも珍しい自噴泉を中心に、足湯やホットベンチなどが整備されるとともに、大噴湯たまごづくり体験などの参加型レジャーを通じて、多くの観光客でにぎわっています。

商業施設の活性化と ゾーニング開発

新たに誕生した峰温泉大噴湯公園などに象徴されるように、その地区を活性化させる新たな名所や、魅力的な商店街の整備も不可欠です。

観光的側面から見れば、「人が集まり、動く」ための新たな要素を生み出すことが、活性化への第一歩。そのためには町と住民が一体となり、より人が集まるために必要なもの、そして人が動くことで効果的ににぎわいを生み出す動線プランなどを考え、作り上げることで課題となります。

産業

恵まれた、かけがえのない まちの資産を活かす。



「河津ならではの良さ」を 再発見・再発信

谷津漁港で開催されている朝市や、地元の農産物・海産物などを活用した新たな料理メニューの開発など、河津でしか体験できない、入手できない希少価値の高い資源を生み出すために、農林水産業をはじめとする各種産業がコラボレートした新たな動きが求められています。

例えば、地元の農産物・海産物を、通信販売や観光業の事業者がより強力な流通ルートに乗せたり、地域の古老が持つ知恵を活かした新商品を生み出したり…。

「河津ならではの新たな価値を生み、これからの町の活性の起爆剤にしていくことは、町に住む人なら誰もが協力できる一大事業です。」



カーネーション引き抜き体験

人が集うイベント開発 そして交流の場の育成

例えばみかん、ニユーサマーオレンジなどの柑橘類は、今や河津町の主要な特産品のひとつとなり、河津を代表するブランドとして全国的にその名を知られるほどになりました。

またカーネーションなどの花卉栽培においても、母の日が過ぎると来年の苗の植え付けを行ったためすべてのカーネーションを短期間に引き抜きをしますが、この引き抜き体験を観光客の方に開放する援農ボランティアなどの展開も行われています。

花卉栽培農家にとっては日常的な作業も、花屋さんでしか見たことのないカーネーションの栽培風景を実感でき、引き抜き体験



谷津港の朝市

ができることは、観光客にとってはかけがえのない貴重な旅の体験となり得ます。こうした例は枚挙にいとまがありません。これまで観光資源や商業資源として確立されていなかった産物も、今や自然を活かした新たな産業として成り立たせることが可能になっているのです。

河津の山や海、川そして四季豊かな田園環境を前提とすれば、新たな商品やイベントの開発は、決して困難なことではありません。こうした気運が高まり、それぞれの先駆者が情報交換と交流を図れる場ができ、そこからまた新たな動きが始まり広がっています。

森林、農業、漁業基盤の 未来を見すえた保全育成

平成二十四年九月、伊豆半島が日本ジオパークに指定されました。これは地球の地形形成活動の痕跡を観察することのできる貴重な地形の資源に対して与えられるものですが、このことに示されるように、伊豆地域は非常に豊かで多彩な地形があり、このことが農林水産業の多様性を支えています。

河津においても例外ではなく、豊かな山林の資源、田園の爽り、魚介類をはじめとする海洋資源はそれぞれがこの地の恩恵に預かっていることは言うまでもありません。

こうした貴重な資産を短期間で消費しつくすのではなく、どうしたら貴重なままに次代に引き継いでいくことができるのか、模索と試行が、様々な分野ですでにスタートしています。

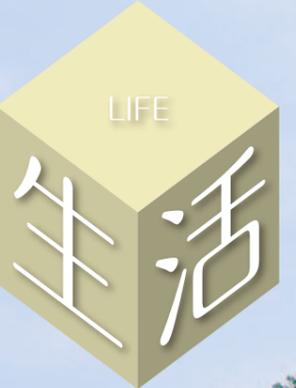


河津の特産品たちが秘めた さらなる可能性を引き出す

河津の水が生み育てる代表的な特産品わさびも、風味自慢の生わさびや一般的に知られるわさび漬の他、山の純朴な香りにわさびの辛みがアクセントを添える「わさび蕎麦」や、新鮮なわさびを自分でおろして食べられる「わさび丼」、また辛いわさびを使ったスイーツという意外な美味しさで人気の「わさびソフトクリーム」など、バリエーション豊かなさまざまな新商品が続々と誕生しています。

またニユーサマーオレンジでは、ソーやゼリーなどの加工食品はもとより、ボディソープや入浴剤などまで、自然素材の良さを活かした独自の商品が開発され、観光客からの注目を集めています。

河津ならではの特産物は、斬新な発想を加えることにより、また新たな河津ブランドを生み出す確かな力を秘めているのです。



人が自ら住みたくなるような、便利さと安心を。



いつまでも住みたい町としての新たな魅力創出へ

東日本大震災の発生により、生活基盤としての都市のあり方やその安全性、エネルギー問題、持続可能な社会への道など、様々な課題が浮き彫りになり、多方面にわたる「暮らしのあり方」が活発に議論されています。

私たちの生活を取りまく環境には、土地・河川・海岸・道路などの都市基盤整備から、生活動線や清潔さなど各種の住環境整備、資源確保とその安全性、クリーンエネルギーの活用など多彩な側面があります。

人が自らそこに住みたくなる町を。河津町はこの願いのもと、恵まれた気候・立地と自然と共栄する町を着実に築いています。



町内一斉清掃風景

都市基盤と生活環境整備でより充実した地域づくりを推進

すべての人にやさしい町として、町の玄関口である河津駅が平成二十二年にユニバーサルデザインの駅へと装いも新たに生まれ変わりました。

さらに主要地方道である県道「下佐ヶ野谷津線」のバイパスも平成二十四年に開通。新たな主要幹線道路の整備によって住民の生活動線が快適になると同時に、観光産業などへも大きく寄与するはず。こうした施設をはじめとする都市基盤整備は、年々積極的な整備が進み、より快適で利便性の高い住環境が整ってきています。また生活の安全面への配慮として、恵まれ



下佐ヶ野谷津線田中バイパス開通式

た自然を活かしながらも、急峻な地形が多い町独自の状況に基づいた治山治水への対策も積極的に行われ、様々なリスクが内在する箇所を選定したハザードマップに基づいて、それぞれに適切な対処が進んでいます。

心るおう美しい地域づくりへ町と住民が手を取り合う

快適な地域環境づくりのためには、上水道整備やゴミ問題、公園や緑地の整備拡充など、取り組むべき課題も多様です。しかし共通して重要なのは、行政と住民とが同じ意識と価値観をもって、理想の町づくりに向けて協力することではないでしょうか。

町の地域計画や全体計画を含めた大規模な施設整備、そして住民の声が反映される仕組みづくりなどを行政側が担当し、それぞれが地域の地域と住民自らが使いやすいように工夫し、自在に活用する。

こうした理想的な関係を構築しながら、河津町全体がより豊かで住みよい町として成長していくために、町では県や国などへの積極的な働きかけはもちろん、その一方で町民からの声の聞き取りを精力的に行っています。





左から、相馬 宏行町長 斉藤 公紀副町長 横山 有久教育長

将来ビジョンに基づく行財政と 町民目線でのサービスの充実

河津町では、行政主導ではなく住民が参加できる町政、住民に開かれた町政をめざし、特に広報広聴活動を充実させています。

住民の一人一人と行政とが、つねに意識と目線を共有するとともに、様々な課題に対してつねに住民の声が届けられるよう各種の窓口を常設するなど、環境整備にも力を入れています。

地方分権の進展により、河津町は「南伊豆地区広域市町村圏」によって、消防・救急・し尿処理・電算化など、様々な側面において地域広域行政の一員として事業を展開してきましたが、協議会の廃止に伴い、今後は河津町独自の施設・組織による事業運営や、新たな広域行政ネットワークの構築を図ることが大きな課題となっています。



河津町議会議員

また財政面においては、地方自治体が共通して抱える経済情勢への不安や、高齢化による地域活性の低下とそれに伴う生産力・消費力低下など、様々な側面に対応する財政事業などを推進して町を活性化させるとともに、一方で経費の大幅な削減や各種事業の効率化、自主財源の確保と新たな資源の開発など、多方面にわたる事業展開を通じ、町財政の健全化を図っています。

町議会議員は、町内各地域および各種産業・教育・福祉などの事業をそれぞれ代表する人材として、定例会および臨時会を通じて、町全体の取り組み方針、課題解決について活発な議論を展開し、河津町をより良い町、より良い地域とするために全力を挙げています。



姉妹都市 長野県 白馬村

北アルプスの山々の美と、
豊かな自然がもたらす恵みを
ぜひご体験ください。

白馬村は、長野県の北西部に位置しており、南北に十六・八km、東西に十五・七km広がっています。

白馬岳、杓子岳、白馬槍ヶ岳(白馬三山といえます)、五竜岳をはじめとする北アルプス白馬連峰が眼前に迫り、その麓には、豊かな田園風景が広がっています。

当村は、恵まれた自然資源を活かした観光が主産業です。急峻な山岳美をみせる北アルプス白馬連峰や個性豊かな七つのスキー場、村内に湧き出る効能豊かな温泉、歴史ある千国街道など、目的は様々ですが、多くの観光客が四季を通じて当村を訪れます。

交通網は、一九九八年長野冬季オリンピックを契機に飛躍的に整備されました。また、お客様をお迎えし、おもてなしする施設、サービスも飛躍的に向上しました。

姉妹都市河津町のみなさんが当村を訪れてくれることを心待ちにしております。

白馬村の自然、施設、サービスがみなさんを温かくお迎えします。



防災協定 東京都 渋谷区

大災害という不測の事態に備え、河津町と渋谷区の両自治体は、人・モノ・情報などを通じて、相互に、瞬時に助けあえるよう、つねに連携を図っています。

平成十六年十一月、地震など大規模災害で被災した場合に備えて、河津町は東京都渋谷区と災害時相互応援協定を締結しました。

この協定は、大規模地震などにより災害が発生した場合に、両自治体が職員の派遣や食糧、日用品、その他必要な資機材の提供、被災者の受け入れなど、幅広い応援対策および応急復旧対策を実施するほか、防災訓練時の応急救援物資の搬送など相互参加や今後の災害時の実効性を高めるための対策を行っていきます。



2013 河津町勢要覧

KAWAZU

TOWN PROFILE

KAWAZU

2013 河津町勢要覧

発 行／静岡県河津町

〒413-0595 静岡県賀茂郡河津町田中212番地の2

電話0558-34-1111(代表)

<http://www.town.kawazu.shizuoka.jp/>

発行日／平成25年9月

編 集／河津町総務課